

「天皇」の「社会心理的基盤」

塹江 清志・水野 和夫*・塹江 光子**

システムマネジメント工学科

(2001年8月29日受理)

“The Social Psychological Base” of “TEN-NOU”

Kiyoshi HORIE, Kazuo MIZUNO* and Mitsuko HORIE**

Department of Systems Management and Engineering

(Received August 29, 2001)

要旨

本論文は、「天皇（なる存在の在り方）」の「社会心理学的基盤」について考察することを目的とした。

日本人の民族的精神構造である「一体感」の心理に基づいて考察がなされた。

その結果、日本人の「神」概念、「受容」の原理、そして、「甘え」の心理の3つの日本人の心理特性が、「天皇（なる存在の在り方）」の「社会心理学的基盤」であると結論された。

1. 目的

本論文の目的は、「天皇（の在り方）」の「社会心理学的基盤」について考察することである。日本列島に居住する日本民族において「天皇」という存在が、「生成」され、そして、今日まで「存続」してきたことは歴史的事実である。この歴史的事実、即ち、「天皇」の「生成」・「存続」という事象が、日本人の「心理特性（精神構造）」に基礎づけられていることを考察することである。「日本」という「国号」をもった「国」、すなわち、「日本国」が、したがって、日本国の国制下の人間集団という意味で「日本人」が、この地球上に出現したのは、「任申の乱」において勝利した「天武（天皇）」の朝廷（天武政権）が、国号を「倭国」から「日本国」に変更したときであると網野¹⁾は云う。それは、689年に施行された「飛鳥浄御原令」で「天皇」の称号と共に「日本」という国号が公式に定められたときである。

しかし、地理的存在としての、後の時代に「日本」と呼ばれるようになった土地に、後の時代に「日本人」・

「日本民族」と呼ばれるようになった人間集団が、それ以前から居住していたことは云うまでもない。そして、後に「天皇」と公称されるに至った「存在」が、689年より以前から存在していたことも云うまでもない。後に「天皇」と公称されるに至った「存在」に、実質的に相当する始源的存在は、邪馬台国の女王・卑弥呼であると和歌森²⁾は云う。とすれば、「天皇（なる存在）」の原型は、「卑弥呼」である。

この「天皇（なる存在）」が、日本という土地で生成され、そして、今日まで存続して来たという歴史的事実の下に、その「生成・存続」が日本人の心理特性に依拠するものであることを考察するのが、本論文の目的である。

2. 「自然神」から「祖先神」へ

2.1 「カミ」と「ミコト」との関係—「カミ」の優位性

湯浅³⁾によれば、古来の日本人の神観念においては2種類の「神」があったという。1つは「カミ」であり、他の1つは「ミコト」である。

カミとは、「自然物そのもの」である。例えば、奈良の「春日山」そのものであり、春日山そのものが御神体である。この神には神社・鳥居がなかったという。

ミコトとは、カミに仕える存在であり、「人格神」（例えば、「天照大神」は「太陽（神）」に仕える存在であった）で、この神には神社・鳥居があったという。ミコトとは、「神子」・「巫女」のことであるという。

したがって、始源的には、カミはミコトより上位であったという。

2.2 「カミ」と「ミコト」の関係の逆転

湯浅³⁾によれば、カミとミコトとの関係（カミに仕え

*愛知工科大学 **聖徳学園岐阜教育大学

る関係にあるミコト)が逆転して、ミコトがカミを支配、あるいは、代行するようになったという。その理由を彼は以下のように説明する。

2世紀後半以降の気候悪化によって日本列島は寒冷化し、カミが無力化した。気候悪化が農作物、特に稲作の不作を生ぜしめた。このことは社会の経済的發展を停滞せしめ、かつ、人心の動揺を生ぜしめ、社会的混乱を招いた。「自然(神)」を祈念することによって「生」を維持してきた日本民族にとっては、このことはカミの「無力化」を意味することであった。そして、2C後半以降から古墳時代にかけての人間の土木技術の発達、当時においては、人間の自然に対する支配力の増大を意味するものであったので、カミの無力化を促進せしめた。

2.3 古墳時代以降における「祖先神」の成立

湯浅³⁾によれば、古墳時代における古墳の形成は、人間が土木技術でもって自然を制御・支配することが出来るという心理を当時の人間に生成せしめたという。このことが、カミ、すなわち、自然神に代わってより人間に近い、つまり、より「人格的存在」である「神」が出現したという。それが、「祖先神」であったという。

考古学・歴史学において、日本人の祖先神が成立したのは、古墳時代以降であることが明らかにされていると湯浅³⁾は云う。

2.4 「人間神」成立の心理的メカニズム

ユダヤ教がキリスト教を否定する根本的理由は、キリスト教が「人間神」を「神」とする宗教であることにある。ユダヤ民族(ヘブライ人)の祖とされているアブラハムが約4,000年前バビロニア地区での「自然神」宗教に対して懐疑的になり、流浪の旅に出て、カナンの地において自然神を否定したヤハウエの神(超越神・唯一神・絶対神・人格神)を信仰の対象とするユダヤ教創設の道を招いたことは周知のところである(Johnson⁴⁾)。

しかるに、キリスト教においては、パウロ等の後継者によって神がイエスにおいて「受肉」したとしてイエスを神とするキリスト教を創設した。ユダヤ人にとって人間が神になる(である)ことは許し難いことなのであり、教義の内容が本質的に一致していても、根本である神の在り方において見解が異なれば、両宗教は相互に相容れないものにならざるをえなかったのである。(キリスト教発生以後の人間社会の歴史は、両宗教間の相剋をめぐって展開したと云っても過言ではない。)

天(超越の天・断絶の王)―地(自然)―人間(祖先)の序列において、ユダヤ人は神を「王」に指定した。キリスト教徒は、それをその僕である人間・イエスに置いた。我々日本人の祖先は、古墳時代以降にユダヤ人とは、

(地(自然)を原点としたとき)正反対方向に位置する人間に神を置いた。正にユダヤ人とは正反対の心理的メカニズムが作用したと云える。この心的メカニズムについて以下に考察したい。

3. 「祖先神」成立の心理的メカニズム

3.1 「自然観」の反映としての「人間観」

① 自然に対する寄生的存在としての人間

歴史を遡るほど人類はその無力さ故にその生は一方的に自然(環境)によって規制されていた。自然にとっては、人類は寄生的存在であった。自然に対する自己の存在の在り方の矮小さ・惨めさの心理的反映として、人類は、自然に対して畏怖感・恐怖感・卑屈な、あるいは、卑下した心理を生成した。その結果、Jung(湯浅¹⁾)の「太古の人間の精神構造」に記述されるような精神構造を形成した。彼はアフリカの原住民と共に生活しそのような精神構造を観察し、「未開人の心理分析」として指摘している。

② 「自然観」の根源性

自己の存在(の在り方)が、トータルに、根源的に、そして、究極的に自然によって規制されるということは、自己の存在(の在り方)にとって、自然との関係がその全てであることになる。人間の個体発生においては、原初的には、彼の存在(の在り方)にとって、母との関係がその全てであるのと同じである。したがって、人類が自己の生を育んだ自然(環境)を認識した結果としての「自然観」が、彼のその後の生における全ての対象・事象に対する認知様式を根源的に規定すると考えられる。人間の個体発生において、乳児期における母との関係において形成される世界観(特に、他者・自己に対する認識の在り方)が、その後の彼の人生における全ての対象・事象に対する認知様式を規定するのと同じである。

③ 「自然観」の反映としての「人間観」

前述のことから人間観(人間に対する見方・考え方)も自然観(自然に対する見方・考え方)によって、根源的、そして、原初的に規定されるといえる。

3.2 「自然」との(に対する)「一体感」「自然観」としての「一体感」・「断絶感」

壺江ら⁵⁾は、「精神構造の規定固としての「自然」」において以下のことを述べている。

1. 「民族的精神構造」(木村⁶⁾)の根源性
2. 「民族的精神構造」はJung(河合⁷⁾)の「民族的無意識」と同じである。
3. 「民族的精神構造」の生成因は、その民族の生を歴史的に育んだ「自然(環境)」である。

そして、塹江ら⁸⁾は、「風土論的精神構造論」において以下のことを述べている。

1. 日本の自然は古来から日本民族の生を歴史的に受容して来た。その結果、日本民族の民族的精神構造は、「一体感」である。それは、日本人の自然との（に対する）一体感、あるいは、自然観としての一体感より由来する。
2. 西欧の自然は古来から西欧民族の生を歴史的に拒否して来た。その結果、西欧民族の民族的精神構造は、「断絶感」である。それは、西欧人の自然との（に対する）断絶感、あるいは、自然観としての断絶感より由来する。

3.3 「自然神」の成立

世界の諸民族は、始源的には、自然神信仰であったという。未開人の心理としてアニミズム・マナイズムの心理が存在する。すなわち、自然には心・霊が存在し、人間の心に応答してくれるという心理である。前述したような日本民族の自然に対する一体感の存在を考慮すれば、この心理は、日本民族において最も顕著となる。諸々の自然物（太陽・月など）を神に見立てて、自然神信仰によって、すなわち、自然（環境）の中で神の掟（自然の掟）を遵守することによって、生を確保しようとした。自然神信仰の成立である。

歴史的、そして、相対的にみて、日本列島ほど人間の生を許容する場所はなかった。そこで生を営んできた民族には「自然＝神」の観念が最も顕著になる。その結果、「八百万の神々」の成立に至るのである。あらゆる自然物の1つ1つに神が宿るのである。そして、それらの神々は人間（の「甘え」）に対して応答してくれるので、人間は、「念ずるだけ」でよいのである。

しかし、人間の生を拒絶するような厳しい自然（環境）に生きる民族は、やがて、人工的な神がヘブライ人によってユダヤ教における神（超越神・唯一神・絶対神・人格神）として創造されると、それをキリスト教・イスラム教として受容したのである（Johnson⁴⁾）。

（ここでの課題ではにので、立ち入らないが、大雑把に云って、インドを含んで自然が人間の生に「許容的」である東洋の宗教は本質的には自然神である（インドの「ヒンズー教」・中国の「天帝」の思想などがそうである。）マレー半島やインドネシアなどのイスラム教については別途考察する必要がある。また、仏教は、少なくとも釈迦の原始仏教においては、神が存在しないので、西欧人の宗教観からは宗教とは云えない。）

3.4 「祖先神」の成立の心理的メカニズム

前述したような自然観の根源性を考えると、各民族の

抱く自然観は、その民族の人間観を規定する。そして、「自然＝神」という観念が最も強い日本民族においては、「人間＝神」という「人間観」が生成される。「人」という言葉の原義には「カミ」という意味が含まれているという。

そして、「祖先神」成立の心理的メカニズムについて、筑波⁹⁾は以下のように云う。

現実に生きている人間の行動を見てみると、どうみても神のように思われぬ。そこで次のように考えた。「生きている人間」の場合、その精神には神の心、すなわち、霊・靈魂・魂が宿っているが、肉体には人間の心、すなわち、肉欲が宿っていて、それが邪魔して生きている人間は神のような振る舞いをしない。しかし、人間が死ぬと、肉体は消滅するが、神の心は、身体の外に出て靈魂となって存続する。（民俗学の知見では、昔は2種類の墓を作ったという。肉体は不浄なものだから住居と遠く離れた山野に遺棄し、鳥につばまされたり、朽ち果てるにまかし、住居の近くに「魂・靈魂」のための墓を作ったという。）そして、清まって神、すなわち、「祖先神」となると考えたという。

日本人ならこの後のことは周知のところである。死者の靈魂は、死後49日経つと清まって「神」となり、毎年欠かさず供養されることによって33年後に個性を持った神が没個性的な神となり、その家の従来からの祖先神（群）の仲間入りをして、子孫との間で一定の関係を保つと日本人は従来から考えてきたのである。

3.5 「恩」と「報恩」の関係

日本人においては、祖先（神）と子孫との関係は「恩」と「報恩」との関係で規定されている。恩とは、祖先の残してくれた遺産としての田地畑、祖先（神）の加護による家内安全・五国豊穰である。報恩とは、祖先の恩に対する子孫の時節毎の祖先の霊（祖先神）に対する供養、すなわち、「祭り」である。子孫は、供養する子孫を絶やさないためにさらに子孫を残す。これが、伝統的な日本人の「生き方」であり、「生きがい」なのである。（したがって、子供を産むことは、決して趣味の問題などではなく、日本人としての人倫なのである。）

（古来から「水」と「安全」が無償であった日本人にとって「まつりごと」は「政」ではなく、「祀り・祭り」なのである。今更「政治感覚」の欠如を悔んでも仕方がないのである。）

村の祖先の霊は、山に常駐し、「山の神」となっているが、農作期には田畑の畦に進駐し、秋祭りによって山に帰還し、農閑期は山籠りした。やがて「氏神々社」に移転したのである。

3.6 「鎮魂」の思想

日本古来の思想として「鎮魂」の思想が指摘されている。これは、一言で云えば、「恨(怨)を残してこの世を去った人の魂は(生前支配者・権力者であった人の魂よりも)盛大に供養されねばならない」という思想である(出雲大社・北野神社の壮大さ・豪華さを説明するのに用いられる)。

死者の魂が、子孫らによって供養されないとき、それは「悪霊・怨霊」となってこの世の人に「災い」・「祟り」を及ぼすと日本人は考えて来たのである。(したがって、子孫を残さないことは、ご近所の皆様にご迷惑をかけることになる。人間関係が生きがいの源泉である日本人としては最も避けねばならないことは子孫を残さないことである。子孫を残さず80才以上長生きすることは福祉国家といえども国民にとっては迷惑なのである。)

この鎮魂の思想が日本人の「甘え」の心理から由来することは云うまでもないことである。

4. 邪馬台国の女王・卑弥呼の「神性」

4.1 邪馬台国の女王・卑弥呼の誕生

① 縄文時代・弥生時代

1. 日本民族の「民族的精神構造」の形成開始

2万年前 日本列島では、裏日本型気候が成立し、日本列島独自の海洋性気候が形成されたという。風土論的立場に立脚すれば、風土が人間の精神構造を根底において規定するので、その風土の根源的規制要因である気候・気象は、その気候の下で生を営む民族の精神構造をその根底において規定するといえる。したがって、日本列島に生を営む民族は、約2万年前よりその「民族的精神構造」を生まれ始めたといえる。

2. 縄文時代

日本列島における土器の誕生は、1.2万年前という。土器の持つ意味を考えると(火・弓矢・栽培物・家畜化など)、土器の誕生は、日本列島における文明の開始とみなせる。すなわち、縄文文化の成立である。以来、1万年間の世界に類のない長期に渡る狩猟・採集生活を主要な生産様式とする縄文時代が開始されたのである。(最近の考古学の知見では、縄文文化の成立は、1.6万年前だという。)(狩猟・採集生活の世界に類を見ない長期に渡る存続は、日本列島の(食の)豊かさを意味するものであり、農耕生活の遅れは、文明度の低さを意味するものではない。)

草創期(1.2万年前から1万年前)・早期(1万年前から6,000年前 8,000年前に海洋性風土の確立)・前期(5,000年前まで)・中期(4,000年前まで)・後期(2,500年前まで)、そして、晩期の気候悪化期(寒冷化)(約

2,700年前頃から開始)を経て弥生時代に移行したという。

3. 弥生時代

縄文時代の晩期の気候悪化期によって縄文時代の終焉、そして、弥生時代が開始された。縄文時代の晩期の気候悪化期に大陸からの渡来人によって、あるいは、気候難民(boat people)によって稲作が移入された。

日本列島の自然条件(気候・土壌・地形など)における稲作の意味(「一粒万倍」)を考えると、日本列島の風土は究極的には、「稲作」を通じて日本民族の「民族的精神構造」をその根底において育んだと云える。

4. 古代国家の形成と気候変動

人類の歴史を振り返るとき、「歴史とは気候変動(正確には「気候悪化」)である」という言葉が妥当する。気候悪化→生活環境の悪化→(生活物資 主に食糧の)生産様式の挫折と社会的混乱(人心の動揺を通しての戦乱など)→新しい生産様式の創造と社会体制・社会生活様式の変革 という図式で人類の歴史は展開してきた。

メソポタミアにおいて最初の国家成立(5,500-5,000年前)の契機は、気候悪化による生活環境条件の悪化であるという。エジプトにおける古代国家の成立も寒冷化によるサハラ砂漠の「砂漠化」を契機とする。同じことが日本列島にも妥当するという。

②邪馬台国の女王・卑弥呼の誕生

日本列島における2世紀前半の洪水多発、そして、2世紀後半の多雪期を経て環境悪化期の1,700年頃の「倭」国の大乱によって女王「卑弥呼」を載く邪馬台国が成立した。

4.2 卑弥呼の「神性」

和歌森²⁾によれば、卑弥呼は、神に仕える「巫女・神子」であったという。巫女・神とは、神と人間との間を仲介する存在である。神の「神意」を人間に伝達したり、人間の神への「願い」を神に祈念する存在である。

神により「近く」位置する存在は「神性」を帯びる。卑弥呼の「神性・カリスマ性」はここに由来すると和歌森²⁾はいう。つまり、彼女は「神主」なのである。

神意・神託を受容するに当たっての手段は「憑依」することによってである。したがって、彼女の憑依性・憑依能力が神性を彼女にもたらしたのである。彼女のカリスマ性に基づいて、現実の政治は弟の王が遂行したという。

和歌森²⁾は、天皇の在り方の原型はこの卑弥呼の在り方にあるという。したがって、天皇は「神性」を帯びた存在であり、その神性は「神意」の「受容能力」に負うのである。

5. 日本神話における「天皇」の政治的権力の正当性の根拠づけ

5.1 「政治神話」としての「日本神話」

「古事記」・「日本書紀」の所謂「記紀神話」による日本神話は、政治神話と云われているが、その理由は、日本神話が、ギリシア神話などと違って天皇の政治的権力・日本国統治権の正当性を根拠づける意図をもっているからであるとされている。

記紀神話が、奈良時代に天皇自らの意図でもって、日本国を統治する政治的権力が皇室、すなわち、天皇の手中にあることを正当化するために編纂されているからである。

5.2 「天皇」の政治的権力の正当性の根拠づけ

① 「天皇家」の「祖先神」

日本人の神観念としてカミとミコトの2種類があり、カミに仕えるミコト、すなわち、カミガミコトの上位にある関係が、2世紀後半以降の気候悪化に伴って、この関係が逆転して、ミコトが優位となり、やがて、古墳時代以降に祖先神が成立したことは前述した。このような観念は、その時代を生きた日本人の祖先の心理に依拠して生成されたことは言うまでもない。

そして、人が死を契機にして神となる、すなわち、祖先神となると考える心理的メカニズムについても前述した。

とすれば、過去のその時代において日本国の政治的権力者であった「天皇家」においてもその祖先神が存在したのである（記紀神話においては、それが「天照大神」である。）。

② 「天皇」の政治的権力の正当性の根拠づけ

記紀神話においては天皇家の祖先神が、一般の日本人の祖先神よりも一段と上位の存在であるとされた。すなわち、日本人の最高神とされている「天照大神」の孫である「アメノオシホミミの命」が、家来の「神々」を引き連れて、天上の神々の国よりこの地上に降臨し（「天孫降臨」）、その子孫である「ワカミケヌ」が「神武天皇」として即位し、ここに初代天皇が誕生したとされたのである。

そして、同行した神々の子孫が日本民族として繁栄するに至ったとされた。したがって、日本人各個人が各「いえ」の「祖先神」を崇拜し、それに献身するならば、その祖先神は、かつて天皇家の祖先神の家来であり、彼を崇拜し、彼に献身したのだから、当人達も祖先に倣って、現存する天皇を崇拜し、天皇に献身すべきであるとされたのである。

5.3 「天皇」の政治的権力の基盤としての日本人の心理

① 「天皇」の「在り方」の原型としての邪馬台国の女王・卑弥呼

和歌森²⁾は、天皇の在り方の原型が、邪馬台国の女王卑弥呼にあるという。卑弥呼は、前述のように憑依能力によって神意を受容し、このことによって巫女・神子の地位に就いた。日本人一般より一段と上位の神により近い位置が、彼女に神性・神主(的性格)をもたらした。この神性が、天皇に引き継がれることによって、天皇が神性を帯びた「神」的存在となる。この日本人一般よりも一段と上位に位置する「神」であることが、前述のこと（「天孫降臨」に由来する天皇家の権威）と併せて、彼の政治的権力を正当化するのである。

② 「天皇」の政治的権力の基盤としての日本人の心理

祖先神を生成せしめたのが日本人の心理なら、卑弥呼に神性を付与したのも日本人の心理である。それゆえ、「天皇なるもの」の存在の「政治的権力」の発生は、日本人の心理にその基盤をもつと云えるのである。

6. 「天皇」存在の存続の「社会心理的基盤」

前述のように日本人の心理に依拠して「天皇なるもの」の政治的権力が発生した。そして、日本民族の社会にこのような「天皇」が発生して以来今日までその存在が「存続」して来たことは歴史的事実である。この「存続」の「社会心理的基盤」について以下に考察する。

6.1 和歌森の説

和歌森²⁾は、日本人の社会には天皇なるものの存在が必要であると主張している。換言すれば、日本人の心理において天皇を必要とする心理が存在するという。彼は、このことを「天皇性と日本人の性格」において述べている。要約すると以下ようになる。

① 「天皇」の「社会心理的基盤」の存在

歴史的事実として、日本人の社会においてある時点から天皇という存在が出現し、そして、以後その存在が存続している。第二次大戦後も日本人の「皇室」への憧憬と崇拜の念は存在している。そして、皇室に対する日本国民の人気はあたかも人気スターへの「それ」と同じものがある。また、日本国憲法においても天皇は日本国民の象徴として位置づけられている。これらのことから、日本人の心理において天皇という存在を必要とする心理、すなわち、「天皇」の「社会心理的基盤」が存在する。

② 日本人統合の「要」機能の基盤としての天皇の「神性」

日本人の歴史において、政治権力の獲得を巡って日本国内に対立・抗争が生じ、国が分裂状態になったとき、

あるいは、江戸時代末期の黒船の来航によって日本が中国のように欧米の植民地となる危機に曝され、かつ、国内的には、幕府と薩長との権力抗争が生じたとき、さらには、第二次大戦の敗戦時のポツダム宣言受諾のとき、これらのとき、日本国が統合され、まとまって1つの国(民族)として自立・独立して存続することが危ぶまれた。これらのとき、その時点での為政者たちは、「天皇」を日本国の統合の「要」として利用してきた。

対立・抗争の頂点に位置する権力者(たらんとする者)達は、必ず、天皇を自己の側に組み込む為の天皇争奪戦を遂行している(平安時代末期の源平の争い、鎌倉時代末期の幕府と足利尊氏の争い、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の尊皇・勤皇の政治工作、幕末の幕府と薩長の争い、第二次大戦の敗戦時のポツダム宣言受諾のとき)。これに成功した側は、対立者を「朝敵」という名を付すことによって打倒し、自己の政権・権力を樹立しようとした。そして、この対立・抗争に勝利して政権を獲得した権力者達は、自己の政治権力構造の中に天皇を組み込んで、より具体的に云えば、例えば、天皇から「征夷大將軍」としての地位を付与されたという形で、日本国の支配者・統治者となってきたのである。

このことは、天皇なるものの存在が日本人にとっては、統合・統一の「要」・「結集点」、あるいは、「接点」となりうることを示すものである。権力者達は、その天皇を自己の側に組み込むことによって、天皇の下に結集する日本人を統合・統一し、自己の政治権力を行使しようとしたことを示すものである。

日本人を統合することにおける、この天皇の「要」としての機能は、天皇の有する「神性」に由来する。そして、その「神性」の起源は、邪馬台国の女王・卑弥呼にある。

③ 「天皇」の「社会心理的基盤」としての日本人の「派閥根性」

権力者達は、自らの政治権力の下に日本国を統一的に支配することを企図したのであるが、自らが自己の権力・実力でもって直接的に日本人・日本国を統治せず、「天皇」を「接点」として・「介」して(例えば、「征夷大將軍」という肩書きで)統治したことにこそ「天皇の社会心理的基盤」が存在する。

天皇の社会心理的基盤とは、日本人の「派閥根性」のことである。日本人の派閥根性が日本人の派閥社会を形成する。よって、その対立を止揚し、統合するために、「接点」としての天皇を必要とする。したがって、日本人の派閥根性が、日本人の社会に天皇という存在を必要とするから、天皇の社会心理的基盤は日本人の「派閥根性」であると彼は云う。

④ 日本人の「派閥根性」の歴史的・風土的原因

和歌森²⁾は、日本人の派閥根性の歴史的・風土的原因について以下のように解説する。

1. 歴史的・風土的にみて、経済的に貧困であった日本人は精神的に未熟であった。
2. 精神的に未熟な日本人は、各個人において自立し得ずして相互に依存せざるを得なかった。その結果として、派閥を形成する「派閥根性」を歴史的に培ってきた。

6.2 和歌森の説への批判

前述のような和歌森²⁾の説に対して著者達は以下のように批判するものである。

① 天皇の「接点」機能の意味

前述したような日本人の「神」観念(自然神から祖先神へ/祖先神成立の心理的メカニズム/邪馬台国の女王・卑弥呼の神性/日本神話)から、天皇という存在の有する神性については、和歌森の説に同意するものである。したがって、天皇という存在が日本人の統合・統一の「要」・「結集点」・「接点」となり得ることに同意するものである。

しかし、権力者達が、天皇を接点として自己の権力を行使するという見解は、少なくとも、説明不十分であると思う。彼等は、天皇を日本国を統治するに当っての日本人一般との接点として、つまり、天皇を「仲介者・調停者・媒介者」として利用することによって、日本人を統合・統治することが可能であったとしている。問題はこの点なのである。この個所は、もう少し的確な記述が必要であると著者達は考える。

過去の日本の歴史において、実際に政治的権力を獲得した者は、彼の現実の実力(主に武力)によってであり、決して天皇の力を借りて、すなわち、天皇の仲介・調停機能を借りてではない。また、政治的権力を獲得した者は、その後の日本国の統治において、天皇の仲介・調停機能を不可欠としたわけではない。和歌森の記述によれば、あたかも天皇のそのような機能が「不可欠」であった、換言すれば、「それ」を欠除すと、権力獲得が不可能であり、また、権力獲得後の日本国統治が不可能であったかのように理解出来る。このことは、今述べたように正しくないと考える。

歴史的事実として、政権を獲得した者は、その後、天皇に強要して、例えば、「征夷大將軍」に任命されるという形で、自己の政治的権力の下に日本国統治を遂行している。このことは以下のように理解すべきである。

天皇から統治権を付与されたという形を採ることによって、権力者達は、天皇と日本人一般との「間」に「位置づけられ」て、日本人一般よりもより天皇に近い位置を占めた。「神」がイエス・キリストにおいて「受肉」し

たように、神に近い存在は「神性」を帯びる。かくして、権力者は、天皇の有する「神性」を分与される。このことによって、彼の政権に「神性」が付与されて、彼の政策は「権威づけ」られる。

したがって、和歌森の説での「接点」(機能)という意味は、天皇の「神性」による権力者への「神性」分与、そして、政策への「権威づけ」と理解すべきである。

② 天皇の「社会心理的基盤」とし日本人の「受容」の原理

権力者達が、自己の実力・権力のみで、直接的に日本国統治を遂行せず、天皇を「接点」として、すなわち、前述のことから、天皇の神性による「神性分与」と「権威づけ」を通じて、日本国統治を遂行した点にこそ天皇の「社会心理的基盤」が存在するのである。それは、「日本人の「受容」の原理」である。この点に関して、和歌森の説は言及していない。

西欧社会には、云うまでもなく神が存在する。西欧人は天上の「神」と地上の「王」との二者によって歴史的に支配されてきた。この世(現世)の問題・身体的「生」の問題は、王の管轄であった。あの世(来世)の問題・精神(魂)的「生」の問題は、神の管轄であった。この世は「力」の原理によって支配・規制されていた。歴史的に、そして、現在も欧米社会の規制原理は、力の原理(父性・男性原理)である。したがって、為政者・権力者が、国の統治を遂行するに際しての必要条件は、「力・権力」であり、「権威」は不要である(あれば、なおよい)。

日本の社会の規制原理は、「受容」の原理(「母性・女性原理」である(河合¹⁰⁾)。河合¹⁰⁾は、この日本社会の受容の原理をそれ以上精査していない。日本人の受容の原理は、いわゆる中国の老荘思想における「受容」の思想とは同一でない。誤解を避けるために、日本人の場合は、厳密には「甘え」の原理とした方がよい。日本人は、自己の「甘え」が「無制限・無条件」に「受容」されることに至上価値を置くからである。したがって、「受容」の価値は、第2義的なのである。それゆえ、自己が他者の「心」(「欲求・要求・意志・意図」)を「受容」することは、「見返り」がない限り、不本意なのである。まして、「権力」でもって「受容」を強要されることには著しい嫌悪感を抱くものである。ここに日本人の権力アレルギーが生じる。

今述べたような意味での受容の原理で規制される日本人の社会においては、権力者達が、自己の意志・命令を力の原理に基づいて執行する、すなわち、自己の権力によって直接的に受容を強要することは、日本人一般に心理的抵抗を生成せしめる。したがって、権力者の意志・命令を「権威」で包括して、あるいは、裏付けて発令す

ることが望まれる。「権威」は、「権力」とちがって、人間に「自発的」に受容する心理を抱かせるものである。神とは、人間存在に「権威」を感じさせるものである。天上の神が存在しない日本人の心理においては、この地上に存在する「現人神」こそ唯一の「神」である。したがって「現人神」の神性を分与され、神性を帯びた権力者の意図・命令は、「権威」を帯びたものとなり、受容されやすくなる(「上官の命令は朕の命令である。」。)したがって、歴代の権力者達は、天皇なるものの存在を必要としたのである。和歌森の説における「接点」という言葉には、今述べたようなことが含まれるべきなのである。

以上のことから、日本人の「受容の原理」に価値を置き、「力の原理」を嫌悪する心理が、「天皇という存在の(神性によって権力者の意図・命令が権威づけられることを必要とする)社会心理的基盤」なのである。

③ 日本人の「派閥根性」について

和歌森¹¹⁾は、日本人の派閥根性が、日本人の派閥社会を生成し、よって日本の国の統合・統一に際して常に接点・結集点が必要とされるという。その接点になり得るのが天皇であるという。そして、前述のように、歴史的に権力者達は、天皇を接点として、あるいは、介して日本国を統治したという。したがって、天皇の社会心理的基盤は、日本人の派閥根性にあるという。

前述の如く、日本人の神観念が、一方で「祖先神」を生ぜしめ、同時に、他方で卑弥呼に「神性」を付与した。その結果として、日本民族の社会に「神性」を帯びた天皇なるものの存在が出現した。出現時点においては、彼は「記紀神話」編纂事業において示されるように、日本国の統治者であり、政治的権力者であった。そして、今日まで天皇という存在は日本の社会に存続して来たのである。天皇という存在の存続の社会心理的基盤が、前述したように日本人の「受容」の原理なのである。

受容の原理が、前述の如く、日本民族の中で神性を有する唯一の存在である「天皇」という存在を必要とする根本的原因なのであり、日本人の社会が派閥社会であることが天皇を必要とする根本的原因ではない。この意味で和歌森の説は妥当ではない。

派閥社会が、社会全体を統合・統一するに際して「接点」を必要とすることは当然であるが、その接点となる「もの」が「神性」を具有していれば、その任にたえうるのは当然である。しかし、接点となる「もの」が「神性」を具有していなければならないという条件は、論理的に導出出来ない。日本人の受容の原理が、前述のように、受容—権威—神性 という図式で「接点」になる「もの」に「神性」の具有を論理的に導出する。それゆえ、天皇の社会心理的基盤は、日本人の受容の原理なの

である。

和歌森²⁾は、「派閥根性」・「派閥社会」という言葉を用いているが、これらの言葉を使用することに著者達は抵抗を感じるものである。「派閥」という言葉自体は、我々日本人の日常生活用語であり、この言葉は通常「負的」な意味をこめて使用される。とすれば、日本人の社会は、「負的」な社会であるとなる。これまでの多くの日本人による人文・社会学の領域における「日本的」なるものの考察は現実には暗黙の裡に欧米社会を比較の対象としているので、欧米社会に比して日本の社会は「負的」な社会であるとの印象を与えることになる。物事の評価は評価尺度に依存するので、評価尺度が明確でない、また、評価尺度の妥当性が確立されていない段階でこのような価値を含んだ言葉の使用は、学術的著述においては好ましくないと考える。

中根³⁾によれば欧米社会を「ヨコ」社会とするならば、日本の社会は、「タテ」社会であると云う。タテ社会は、日常生活用語で表現するならば、所謂「派閥」を生成しやすい。「ヨコ」・「タテ」は社会構成原理の問題であるので価値とは無縁である。タテ社会は、社会全体を統合・統一するに際しては、所謂「接点」を必要とする。したがって、天皇の日本国を統合・統一するに際しての「接点」機能を説明するに際して、「タテ」という言葉で十分説明できる。したがって、派閥という言葉の代わりに中根³⁾の「タテ」という言葉を使用した方がよいと考える。

④ 日本人の「派閥根性」の歴史的・風土的原因について

和歌森²⁾は、日本人の派閥根性の原因を日本人の精神的未熟さにあるとしている。このことは全く不適切な論述である。精神的成熟度の尺度が明確にされないでの論述だからである。欧米人は、往々にして彼等の精神的成熟度の指標でもって日本人の精神的未熟さを指摘する（例えば、「菊と刀」における「罪の文化と恥の文化」）が、それは彼等の勝手であり、我々日本人が彼等の指標に則る必要はない。何故ならば、彼等の指標の絶対的妥当性など何処にも存在しないからである。

中根³⁾の説によれば、欧米人が「資格」を重視するのに対して、日本人は、「場」を重視し、この心理が、「タテ」社会を生成せしめるとのことである。この説明によれば、日本人の精神的未熟さによらないで、和歌森の「派閥」を説明できる。したがって、余計な問題を避けることが出来る。日本人の「場」の社会が、「タテ」社会を生成せしめ、それは、統合・統一に際して「接点」を必要とすると説明しておけばよい。

さらに、和歌森は、日本人の精神的未熟さの固歴史的・風土的な日本人の経済的貧しさとしているが、このこと

は事実として全く誤りである。西欧地域と比較して、歴史的、かつ、風土的には日本列島の自然は、日本民族に豊かな「水」（「食」の象徴）を「安全」（太平洋の防波堤的な機能）を提供し、その結果日本人は、地球上でも最も豊かな「生」を育むことの出来た民族の1つと云えるからである。このことは、著者ら⁵⁾は、「風土論的精神構造論」で著述した。

6.3 土居の説

土居¹⁰⁾は、「甘え」の構造において日本人の民族的精神構造（木村）として「甘え」の心理を指摘している。そして、彼は、以下のように述べている。

日本人は、自己が無条件・無制限に「甘えられる状態」に最高の価値を置くものである。この心理が天皇の在り方に投影されている。天皇という存在は、現実の日常の政治的世界においては、全く無力な存在であり、周囲に「依存」することによってしか、換言すれば、「甘え」ることによってしか生存し得ない。日本国における最高存在である天皇という存在をこのような状況に置くことに、日本人が「甘え」に至高の価値をおくという心理が投影されていると云う。

したがって、土居¹⁰⁾の説によれば、天皇の心理的基盤は、日本人の「甘え」の心理である。

7. 結論

以上のことから、天皇の社会心理的基盤についての著者たちの結論は以下ようになる。

塹江⁹⁾は、「精神構造の規定因としての「自然」」において、歴史的、風土論的、そして、精神分析学的観点から、世界の各民族は、その民族が歴史的に生を営んで来た自然（環境）に対して形成した自然観がその民族の民族的精神構造を生成せしめると述べた。そして、日本人の民族的精神構造が「一体感」であり、ここから、日本人の心理特性である「甘え」の心理や「直接接触の人間関係」などが由来することを述べた。このことを踏まえて以下のように云える。

1. 「直接接触の人間関係」様式は、「場」による社会集団を生成する。その結果、日本の社会は無数の場による集団から成り立つことになる。場による集団における組織原理は、「タテ」となる。したがって、日本の社会全体を統合・統一するに際しては、接点を必要とする。
2. 接点となり得る存在は、日本人一般がそれに服従することができるような存在でなければならない。そのためには、彼等よりも何等かの意味において、一段と「価値ある」存在でなければならない。

3. 日本人の自然観から由来する日本人の「[受容]の原理」を考慮するとき、日本人が、日本人一般より価値ある存在として認める者は、「権力者」ではなく、「権威者」である。
 4. 人間一般よりも価値ある権威者とは「神」である。すなわち、「神性」を持った存在である。
 5. 日本人の神観念は、個々の日本人の家における「祖先神」を生成した。日本国の支配者となった「天皇家」は、天皇家の祖先神を個々の日本人の祖先神の上位に位置づけ(記紀神話)、現実の世界における天皇家による支配を正当化した。天皇家の神性は、邪馬台国の女王・卑弥呼の巫女としての神性に基礎づけられた。
 6. 歴史的経過の中で、現実世界での支配者としての天皇家の実力の衰退にも関わらず、天皇家の神性は、日本人の神観念によって保持されてきた。その経過の中で、日本人の心理的特性の1つである「甘え」の心理の投影を受け天皇の在り方が規定されて来た。
 7. この天皇の有する神性が日本民族の統合・統一に際して接点・結集点として機能する。それゆえ、各時代における日本国の支配者達は、日本人の受容の原理に規制されて、統治に際して、彼の政権・権力を権威づけるために天皇の神性を利用した。
- 以上のことから、「天皇の社会心理的基盤」とは、根本的には日本人の「自然観」、すなわち、「一体感」であ

る。「一体感」から由来する「人間観」を通じての「神」観念(1)と「一体感」から由来する「[受容]の原理」(2)・「甘え」の心理(3)の3つの心理が「[天皇(の在り方)]の「社会心理的基盤」であると結論出来る。

文献

- 1) 網野善彦：「[日本]とは何か」, 講談社, (2000)
- 2) 和歌森太郎：「天皇性と日本人の性格」(現代心理学シリーズ第2巻「日本人の性格」第2章), 朝倉書店, (1970)
- 3) 湯浅泰雄：「神々の誕生」, 以文社, (1972)
- 4) Paul Johnson (石田友雄監修)：「ユダヤ人の歴史」上・下巻, 徳間書店, (1987)
- 5) 塹江清志5：「精神構造の規定固としての「自然」」, 名古屋工業大学紀要, pp.187-192, Vol.51, (1999)
- 6) 木村敏：「人と人との間」, 弘文堂, (1972)
- 7) 河合隼雄：「ユング心理学入門」, 培風館, (1967)
- 8) 塹江清志5：「風土論的精神構造論」, 名古屋工業大学紀要, pp.165-172, Vol.52, (2000)
- 9) 筑波常治：「米食・肉食の文明」, NHK, (1969)
- 10) 河合隼雄：「昔話と日本人の心」, 岩波書店, (1980)
- 11) 中根千根：「タテ社会の人間関係」, 講談社, (1967)
- 12) 土居健郎：「甘えの構造」, 弘文堂, (1971)